

浜辺先生 町に行く スヌー物語

浜辺先生 ぶーらぶら

田辺聖子



田 辺 聖 子 長 篇 全 集

浜辺先生 町を行く

スヌー物語

浜辺先生 ぶーらぶら

田辺聖子



文藝春秋

田辺聖子長篇全集

14

浜辺先生 町を行く

スヌー物語 浜辺先生ぶらぶら

一九八二年九月一日 第一刷

定価 一八〇〇円

著者 田辺聖子

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三

電話 (〇三) 二六五一一二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

製函所 加藤製函

万一、落丁乱丁の場合は

お取替え致します

田辺聖子長篇全集第十四巻／目次

浜辺先生町に行く

5

スヌー物語 浜辺先生ぶーらぶら

189

解説 鴨居羊子

323

A D 装画 装幀
坂田政則 本くに子 灘本唯人

田辺聖子長篇全集第十四卷

浜辺先生町に行く

移転通知

関口青年は椅子のベルトもはずれんばかり身を乗り出して、窓の下を眺めていた。いまはもう、眼下に奄美大島がみえはじめていた。

関口青年ははじめての奄美旅行であるが、私は既に三度めである。

(それで、窓側の席を彼に代ってやったのである)

しかしなんべんきても、この南方洋上に浮ぶ星屑のような島々は私を感動させる。——真ッ蒼な海に緑濃い島々。そのまわりをふちどる白い波のレース。それは珊瑚礁に碎ける波である。寶石が点在するように、島々は海の中にちりばめられていた。

そしてその中の一つの島をさして我々は、羽をつばめて墮ちてゆく天使のように、スーッと、地上へ舞い下りる。それは、海の向うから飛来した植物か穀物の種子が、風に吹かれてこの島へ落ち散った、という感じでもある。

また、青々とした大海原の中の、ほんの一点、針で突いたような島へ、ねらいあやまず飛行機が着陸した、という風情でもある。

上空から見ていると、飛行機の方が島より大きくて、はみ出しちゃわないか、という不安もあるのだ。島はまるで車輪の下に隠れてしまいそうなくらい、小さく思われる。「オーラ、着いた！ 着いた！」

と関口青年は元氣よくいった。それは私を起たせるための掛声のようでもある。この青年はセツカチなのである。

彼は未知のところへやってきたので、勇気凜々として、好奇心のカタマリにみえた。

「荷物は僕が持ちます、早く出て下さい」

と彼は私に指図した。

いったい、この青年は私に対して、きわめて命令的な口を利く。彼は毎朝新聞の文化部の記者である。そうして私は、毎朝新聞にこんど連載小説を書くのだ。その取材をするため、奄美に飛んできたのである。

私は、彼の新聞には、前にもコラムの連載をしていた。

そのときは、鄭重な物腰の、おだやかな中年紳士が私の係りであった。この、あたまたまのまん中が禿げた紳士は、充分人生経験もゆたかであり、教養ふかく、かつ、私の芸術、私の才分に対して、それ相応の敬意を払っているようにみえた。その証拠に、彼は終始、私に向って、

「浜辺先生、浜辺先生」

といい、私の方がいくぶん、彼より年下であるにかかわらず、「先生、こうされますか」「先生、こちらへおいで下さいませいか」などと敬語を使っていたのだ。そうして彼が私について記事を書くときは、きまって、「浜辺女史」という語を用いた。

私は「先生」も「女史」もきらいである。きらいであるが、しかし先方がそういう言葉を用いる精神状態はやはり凡人の常として当方には快いのだ。わるい気はせぬという所である。

しかるに関口記者は私のムスコぐらいの年であるにかかわらず、「浜辺サン！ 浜辺サン！」と呼び立て、「早く来て下さい！ なにグズグズしてんです！」と叱咤するのだ。それは、無礼であるというより以上に、彼がまだ何の手も加えられていない、原木というか原石というか、「山から蹴ッ転がした松の木丸太」そのままであることを思わせた。彼はすでに、もう二十七歳になっており、まんざら、大学出たて、というのでもないのであるが。

しかし、文化部へくる前は、彼は花の社会部記者であったのだ。私は新聞社の内部機構など、どうなっているのか分らないが、人事問題にはもう少し慎重な配慮があってもよかりそうに思う。——関口青年は社会部に未練をもっており、また、文化部へ廻されたのを不満に思っていた。彼

は文芸美術に不案内で、素養も関心もなく、それを隠そうとしなかった。それゆえ、私の係りにつけられたことに腹立てているようにみえた。私の書いたものなど読んだこともないにちがいない。ひょっとしたら、私の名前も、文化部へ来て初めて耳にしたのかもしれない。

尤も、社会部記者ならそれが当然かもしれない。私は以前ある新聞の社会部記者がインタビューに来たとき、いろいろ答えたが（それは町の緑化運動について、であった）彼はすんでしまおうと、

「ところで、肩書はどう書いておきましょう？」

といった。私は自分では作家のつもりであったが、ハタ目にはそう見えないのかと、大いに自信を失くし、キョロキョロして、

「主婦——です」

とあやふやにいった。彼はうなずき、そうメモに書いた。たいへん素直な男であった。私はやはり考えてみて、私がおちよくついていると彼はあとで怒るかもしれないと思い返し、「マア、作家にしまして下さい」

といった。男は、アアソウ、といって、また消して、「作家」とした。

思うに、関口青年は、あの男と、ちよぼちよぼであるように思われる。彼は私の書くものに対し、敬意も愛着も、関心すらなく、ただ、取材の手配をし、便宜をはかり、期

日におくれず原稿が入ればそれでよいのであるらしい。

慣れれば、そういうドライな青年の方が気楽でもある。かつ、青年は、あんが根は親切なのであって、礼儀しらずで雑駁なようであるが、私がしてほしいということは、してくれる俠気もある。えらそうな口を叩くのは、私を、女の数の中へ入れていないためのようでもあった。尤も、それは私も同じだ。

私は、今までに、取材のため人にあったり、近郊をまわったりするのに、彼と行を共にしてきたが、こんどの取材みたいな長旅の同行ははじめてである。私にしてみれば若い男とたった二人きりで、二、三日間、旅するというのは破天荒なことである。(挿絵を担当してもらう画伯は、ヨロッパからの帰国がのびて間に合わなかった)

しかし、若い男と旅したとて、私も彼を異性とみとめにくいから、どうということはないのだ。私は「年下の男」趣味、とくにベツト趣味はない。若者好み、という中年女の気がしれない。なぜなら若い息子たちをみなれて、すっかり楽屋うちがわかり、興ざめたからである。この関口青年もウチへ帰ればお袋に向って(彼は独身である)「めし!」とどなり、「オレ、ナスビは食わん!」と箸でこづき、「アイロン! 早う!」と足でスポンを蹴り上げるに違いないのだ。私はそんな可愛げのない男はきらいである。彼とドウコウするなんてことは、恐怖の大王が空から槍の

雨を降らしても考えられない。

機外のタラップへ一歩出ると、曇っていたせいもあるが、重い、むしむしした空気で、ねっとり湿っていた。これは熱帯のむし暑さである。九半月ばというのに、内地の真夏のようだ。

小さな汚い空港は人であふれ返っていた。着いた人出発する人、そのほか、地元の人なのか、待合室のベンチに腰かけてじっとしている人もたくさんあった。観光客の団体がどやどやと出ていってバスに乗ると、待合室は風に吹き払われたようにすこし空いた。

「田舎のバス停のような感じですか。コーラ飲まんですか?」

私が要らないというと、関口君は太股にベンチをとびこえ、これまたバス停前のよろず屋というような食堂で飲んだ。彼は商品ケースの中の、埃をかぶったみやげもの——ハブ皮のバンドや財布に、何かをバカにしたような一べつをちらとくれた。

私は空港の外へ出てみた。どこか東南アジア人といった風趣の面立ちの男たちが、白いシャツの裾を風になびかせて、空港出口にたむろしていた。それはタクシー運転手たちだった。

熱い湯のような雨が、ほそく降っていた。

山々は黒に近い濃い緑で掩われていた。遠く天空から見

ると、いかにも自然の恵みのゆたかな緑にみえたが、近ま
でみる山は、ねじまがって何の役にも立たないような灌木
が、山肌にしがみつくように生えており、それがびっしり
と葉を繁らせているだけのことだった。

くだものなる木や、金目になりそうなのは山には生
えていなかった。奄美の樹木の中では芭蕉は美しいものだ
が、それも、道路のわきにはみえない。不毛な緑ばかりで
ある。

あの内地でみる山の、たとえば杉の美林で掩われた山の
美しさやゆたかさは、感じられなかった。物悲しく、貧し
げな表情をしていた。

しかしそれも私にはなつかしかった。私は奄美が好きに
なっていたので、氣候のうつとうしさ、（それは南国の憂
鬱とでもいうような、うちひしがれそうな、くるしいむし
あつき）山々のみどりの暗鬱な濃さも好ましかった。

「うわ、暑いですなあ。えらいとこへきましたなあ」

と関口青年はがっかりしたようにいった。彼は大阪育ち
なので、アクセントは大阪風である。

「やけにむしむしする。いやな氣候ですなあ。第一印象は
わるいなあ、いつもこんなのですか？」

「いまにこのよさが分りますよ」

彼はタクシーを物色し、トランクを開けさせ、荷物を積
みこんだ。私たちは乗りこんだ。

メシをどこで食うかと彼はさわぎ立てた。彼は空腹にな
るとうるさい男である。

「村へ着いてから食べたらしいわ」

「それでは三時頃になりますよ！ さっきの食堂で、パン
でも食べるか、途中の名瀬の町で何か食べましょう」

「村へいけば、とびきりおいしい奄美の田舎料理が待って
いますよ。名瀬の大衆食堂なんかで、カレーなどかきこむ
なんて感心せえへんわ、叔母さんが、山ほどごちそう作っ
てますとも」

「何時間も先のごちそうより、いまのラーメンの方がいい
けどな」

「まあ、辛抱しなさい、叔母さんの手料理たべたら、がま
んしてよかったと思うから」

叔母というのは、私の夫の叔母である。夫の亡父母は奄
美の出身で、叔母は母の妹に当り、いまは生まれ故郷の村
へ帰ってひとり暮らししている。若いときから独りで関西で
働いていた。一時、私たちの家にも身を寄せていたので、
私とはしたしかった。私は叔母の、正直で陽気で親切な気
性が大好きである。更に、勤勉実直という明治生まれらし
い気風も好きである。

叔母の村は、奄美大島の最南端にある。島内の内陸部は
けわしい山が多くて、本来はバスばかりが足のたよりであ
る。

「ところで、村での取材は何々ですか、会われる人の手配とかはついていっているんでしょうか」

「いえ、それはいいの」

「調べるものとか、見る所とか」

私はそんな確固たる方針で取材した事はなかった。

「ただぶらッとまわればいいの」

「小説のどこかに奄美がでてきますか」

「出ないかもしれない」

関口君はしばし黙り、新聞社の代弁をする如く、

「しかし、奄美という字ぐらいいは、どこかに入れといて下さい、せっかく取材にきたのですから。頼りないこと、い

わないで下さい」

「気分しだいだから、よくわからない。でも何か、つかみたいの」

関口君は私の言葉を考えている風だったが、

「僕、率直にいうて、浜辺サンの小説、あんまり好きやないんです」

こんなとき、オヤマアアラサテとでもいうのかしら。

「どうして」

「好いたホレたというのは好かんのです。SF小説が面白い」

「でしようね」

「それから企業小説とか内幕のものと。戦争物もよみま

す」

「結構ですね」

といわなければしかなない。

「数字とか、きちんとしたデータのあがっている小説、現

実にモデルのある小説は面白いですなあ」

「ハハハ」

私はじつと頭をたれて反省した。

「若い女や男が出て来て、齒の浮いたようなことをいう小説は、よんでて、尻こそばゆいんです。いっそ、セリフな

してボルノ小説の方がマシです。浜辺サンはどっちつかずで困ります。あんまり、本は売れんでしょう？ そのはず

です」

私は、もしかしたらこの青年は私の意気を沮喪させるべく、商売仇の新聞社に買収されているのではないかと思つた。

しかし関口君は一点、くもりもない無邪気な顔である。

私は田舎料理に話を変えた。

エラブチ（こぶ鯛）の煮つけ、イギスという海藻、豚足

煮込（奄美には牛肉はなく、すべて豚である）……車海老

の刺身。

「そうそう、そういえば、スネ、足のことをここではハギ

という。古語がいくらも残っているのよ。豚足は豚ノ脛というの。お尻のことはマリ。嫁、主婦のことをトジという。

奄美では美人のことをキョラもんという。キョラはけうらで、王朝の小説に『いとけうらにおわしまししかば』などがある、アレですよ……」

ふとみると、関口青年は顎もはずれんばかりの大欠伸あくびをしていた。私は奄美に美しい古語が残っていることに関心を持っていたのだが、彼は必ずしもそうではないらしい。たとえば夫の話では、子供のころ、あたまに魚のたらいを載せた魚売りの女が、

「ゆうこんしゅれー」

と売りにきたそうだ。私の思うに、「ゆう」は「魚」いおであり、「こんしゅれー」は「買い候え」きこうえである。私はそんな話をしたくてならぬのだが、関口青年あいてでは張合いもなく、また話す内に自分が、若い者になんの興味もない昔話をとくとくとする隠居爺さんのような気がしてくるから止めた。

運転手はまだ若い、色の黒い男だった。私たちにどこから来たのかとたずねたりした。

関口君は運転手の頭上にさしこんであるホンコンフラワ―の赤いハイビスカスをさして、

「それはハイビスカスですね」

といった。

「そう」

運転手は何だか誇らしそうにいった。

「さつきから道のあちこちに咲いてたでしょう。一年中咲いています。ピンクもあります」

関口君は興味ないのか返事しなかった。彼は自然には興味がないようにみえた……。そういえば、飛行機を下りるまでは期待で一杯だったのに、その意気込みがだんだんしぼんでいくようにみえた。車が名瀬へくるとやっといきいきした眼になって、「きれいな町やなあ！」と叫んだ。しかし私には車やビルの多い変哲もない都市のように思われた。名瀬の町を通るとき、ことに関口君は盛り場に興味を示すように思われた。彼はやはり町っ子であった。

「パチンコ屋があるぞ！」

といい更に、

「バー街もある！」

といった。名瀬の町には屋仁川やんど通りというにぎやかな通りがある。関口君の関心はそのまま、日常生活の反映のよう^うに思われた。彼は首をねじって見送っていた。

「村には、ありますか？ パチンコ屋にバー」

「ありませんよ、そんなもの……戸数九十戸ばかりの静かな半農半漁村です」

「そこに三晩もいるわけですか」

青年は身悶えした。

「でも景色はいいんですよ」

と私は慰めた。青年は浮かぬ顔で、

「景色、ねえ……」

「となりにとても美しい娘さんもいるし」

「ハハア」

関口君は獵犬のように耳をそばだてた。

「あちらに美人は多いですか」

「多いです。それに鳥唄もきけるし」

「あ、そうでした、録音するんでしたね」

関口君は私のたのみで録音機をたずさえてきていた。

「では、向うへいったら、まず人に集まってもらって、歌つてもらって録音して、と」

関口君は手帖にかいた。

「カメラを持ってきましたが、おどりもう一つしておくのどうでしょう？」

この島には、八月おどり、盆おどりといろいろ、踊ることがあつてにぎやかでたのしいそうだ。去年は、私と夫と二人でいったがあいにく雨が降ってお流れになった。しかし今年は、私たちのいった日がお盆に当るのかどうか、ハッキリたしかめていないので分らない。

叔母にきいたのだが、叔母は年よりらしく大ざっぱで、電話の向うで、

「まあ、おどりなんてもんは、いつでもおどれるから……」

とのんきなことをいっていた。

関口君は手帖に、

「おどり」

とかきこんだ。

「では、歌がすんだあと、おどりをおどってもらいましょう」

「そうね」

「そのお礼を、しなきゃいかんでしょうなア」

「お礼って、踊ってる人や歌う人に、ですか？」

「そうです。いそがしい処を我々の取材に応じてくれるのですからな」

「やはり、払うものかしら」

「謝礼はすべきでしょう。尤も」

と関口君はいたずらっぽく私をみた。

「これを出すのは、浜辺サンではありません。ご心配なく。ホンダサンです」

「ホンダサンって？」

「大毎朝の社長です」

と、関口君は、わざわざ「大」をつけた。

「では、もういちど手はずを。えー、これから村へついて、浜辺サンの叔母上なる人に昼食をごちそうになる、而してその後、村の人に集まってもらい、歌と踊りを録音、ならびにフィルムに収める、と。今日の仕事はこれでもう一ぱいですな」

と彼は、とても満足そうにいった。

私はしかし、そんなうまくいかしら、と思った。

奄美の島には黒糖と米で作った、おいしい焼酎があるのだ。

咽う前に飲まれたら、あとは收拾つかない。

「ウーム、そんなもんがあるんですか、それはうれしい。

僕、奄美を見直した」

道は悪い上に急カーブが多くて私たちはこてんこてんと転がされた。それで私は車に酔ってしまった。それでもとうとう村へ着いた。

右は海、ガジュマルとアダン（アダン）の林がつづく向うに、海がみえた。やがて、道の両側は珊瑚の化石を積み上げた石垣になった。雨は上って薄日がさしており、芭蕉の葉やハイビスカスが、村の家々の低い屋根を隠して美しく拡がっていた。

このへんは屋根に瓦をおかない。低いトタン屋根にしてがっちり打ちつけ、コールタールなど塗る。烈しい台風の通りみちなので、家は地を匍うように作られていた。

タクシーの音をききつけて叔母が満面に笑みをたたえて飛び出してきた。そうして私のあとから下りた関口青年をみて、あわてて深々とおじぎをし、

「アリヤー、ようお越し……」

とのぼせたような目ではにかんだ。叔母は七十であるが、

人見知りしてはにかみやなのである。南国の陽にやけて色は黒いが、イキイキした表情、すらりと伸びた体つき、婆さんにしては背がたく頑丈で、いい体格であるのだ。とても七十にはみえない。

叔母は一帳羅のスーツを着こんで、客人をまちかまえる心意気のほどを示していた。

叔母の家は、縁の低い、小さな家で、大まかな造作は本職の大工さんがしたが、あとは彼女の手作りである。ふた間と、それにつづく台所と便所、それがすべてである。ハイビスカスの生垣でかこまれた庭がひろく、鶏小屋と、畠があつた。反対側には花も植わっていた。叔母は昂奮の余り涙ぐんでいた。

関口青年は物珍しそうにまわりを見た。ことに床の間——氷枕や、どこかの土産物らしい貝細工や、「仲よき事は美しき哉」とある額や、折タタミ傘、水筒、鏡台が雑然と並べてある床の間を物めずらしく見やった。それら全ての物の上に猿がちゃんちゃんこを着て、こつちを向いてすましている写真の額があつたからである。叔母が長年飼つてかわいがっていたカニクイザルの「タンビ」が去年死んだらしかった。ついでにいうとタンビというのは奄美の英雄の名だそうである。

私は叔母の顔を見てうれしかったので喋りつづけていた。叔母は氣に入りの甥っ子（夫）に今年はいえな残念